



もはや美術品としか形容のしようがない帯留め。

# 王 伝統の手技

第八回

## 古く古墳時代初期から続く彫金。その圧倒的な歴史を背負いながら、新たな「美」を彫り出す清水洪政さん。

一本のタガネと小さな金槌一つで、金属に命を与えていく。それも今では数少なくなった和彫り、洋彫りをこなす技である。長い錬磨の時間、を物語るのが、手の指に沿って摩滅している金槌の柄だ。



日本彫金会展東京都知事賞を受賞した「風神・雷神」。

## 彫金の「イロハのイ」はタガネをすることから始まる

ここは東京・豊島区駒込。JR 巣鴨駅から商店街を抜け、住宅街を歩いていくと、彫金師・清水洪政さんの工房兼自宅が見えてくる。

清水さんは平成19年に東京都が優秀技能者として定めた東京マイスターに認定。翌20年には厚生労働大臣より卓越技術者に贈られる「現代の名工」を受賞した日本彫金界の重鎮だ。お目にかかる前に拝見した写真は、伝統を頑なに守ってきた職人さん、といったイメージがあったが、

「ま、長い間やってきて、気がついたら、そんな賞をいただけるところになっていた、ということですかねえ」

そういつてにっこりと微笑む清水さんは、優しそうな美術の先生、といった印象だ。1926（大正15）年生まれの御年84歳。だが、そのハツラツとした口調からは、年齢はまったく感じられない。

清水さんに案内され、2階の仕事場へおじゃますると、跡継ぎで長男の貴政さんが指輪に彫金を施している最中だった。静

寂の中、チンチン、チンチンと金属を打つ高い音が、6畳ほどの仕事場に響きわたる。清水さんは、この書斎のような佇まいの工房から、数々の作品を世に送り出してきたのだ。

彫金は、タガネと金槌を使い、金、銀、銅、アルミ金属の表面に模様を打ち出し、彫り、透かし、象嵌（金属にほかの金属を嵌め込む技法）といった装飾を施す技法のこと。その歴史は古く、古代エジプトやメソポタミアにまで遡るといわれる。

さっそく、清水さんに作品を見せていただいた。プローチ、指輪、ペンダント……中には大きな額に納められた彫金もある。どれも繊細かつ緻密で、豊かな詩情が色濃く漂うが、これらの模様を生み出すのが1本のタガネだ。

「彫金は、まずタガネを作ることから始まります。絵画でいえば、素材の絵の具を自分で作っていくのと同じ。それが彫金の「イロハのイ」というわけです」

細い鋼材を8cmほどの長さに切断し、切っ先を微妙に加工し作っていくのだ。

現在、清水さんは100本ほどのタガネを使用しているが、むろん1本ずつどんな線が彫れるのか、全部、頭に入っている。そして、金槌でひと打ちずつ彫り進む、1本の線が無限の世界を作っていくのだ。

静寂を邪魔しない  
リズムカルな音から  
細密な彫金が仕上がっていく

ながら、自分なりの「道具」に仕上げていく。

「片切り彫りを使うと、筆で描いたような抑揚のある線が描けるんですが、毛彫りの場合は、1本のタガネで1種類の線しか彫れません。だから、どれを使うかは長年の勘、ということに

なりますね」

父親の仕事の関係で、清水さんが一家で福島から上京し、御徒町に移り住んだのは幼少時代。「たまたま向かいに、飾屋さん」といわれる細工職人さんの家がありましてね。そこに出入りしているうちに金属いじりに興味を持つたんです。今思えば、それが原点でしたね」

1941（昭和16）年。太平洋戦争の最中に尋常小学校を卒業した清水さんは、川崎の軍需工場で航空計器などの製造に携わった。そして昭和20年、静岡の工場で終戦を迎えることとなる。19歳のときだった。

「敗戦で工場は閉鎖。知人のツテで浅草橋の貴金属加工の製作所で働くようになったんです」製作所は、社長以下数名の小さな町工場だったが、



①ヤニ台をガスバーナーで温める。



②温めたヤニ台にアルミ板を載せる。



③ヤニ台に載せたアルミ板を仕事機の万力で固定し、図柄を転写する。



④金槌を操りながら、タガネで図柄に沿って彫っていく。



⑤繊細で緻密な見事な技。

時の長さを見せる金槌の柄。手の指に沿って摩滅している。



清水洪政さん

清水洪政 (Shimizu kousei)

1926(大正15)年福島県白河市生まれ。幼少時代に一家で上京し、職人の町として栄える御徒町(台東区)へ移り住む。下谷区立下谷尋常小学校卒業。第二次大戦の最中だったため、川崎の軍用航空機工場へ。ところが、多くの同僚が召集される中、類まれなる技術が惜しまれたため徴兵されず、昭和20年、静岡で終戦を迎える。帰京後、金属装身具の加工工場に就職。同社で、のちに彫金の師となる柿島義香氏に出会い、神奈川県川崎市にある同氏の工房で彫金を学ぶ。昭和22年、同社を退社。3年後の昭和25年には独立し「清水彫金工房」を設立。平成元年、東京都伝統工芸士に認定。その後、アルミ板に斬新な造形を施した「風神・雷神」で日本彫金会展東京都知事賞を受賞。平成7年、豊島区伝統工芸士第一号に認定。平成19年、東京マイスター認定。翌20年には、厚生労働大臣より卓越技能者に贈られる「現代の名工」の授与。清水彫金工房 東京都豊島区駒込7-10-9 TEL:03-3917-9487



金に飛天の笛吹童子を浮き彫りにしたペンダントと犬のプローチ。

蝶が浮き上がった驚きのペンダント。



跡継ぎであり弟子である貴政さんと。

えなくてはいけないので、今度自分の仕事が捗らなくなつて。結局、私が深夜まで働かなくちゃいけなくなつたんです」  
 そういつて笑う清水さんだが、これまでに12人のお弟子さんを独立させ、同時に多くの作品で、日本彫金会展東京都知事賞をはじめ数々の賞に輝き、その名をとどろかせてきた。  
 現在は彫金師として活躍する一方、伝統工芸教室で講師として後進の指導にあたっている。  
 「これまでは彫金という男性、というイメージがあったんですが、最近は女性の志望者が多いです。これも時代ですね。皆さん、とても熱心で教えがいがありますから、私も刺激されますよ」  
 この道60数年にして、まだまだ意欲的な清水さんだが、

そんな氏の座右の銘は――。  
 「そうですね。しいていえば、物づくりは苦しみづくり。でもその先には必ずできたときの喜びがある」ということ。だから、まだまだ頑張らなくてはいいけませんね」  
 自分にいい聞かせるように話す清水さんの表情には、ひとつの職を通して技を磨き続け、いままなお第一線で活躍しているからこそ、まどえる風格が漂っていた。  
 ※彫金技術の起源は古墳時代初期。当時の冠帽や指輪などの装身具には、すでに毛彫りや透彫りといった精巧な技術を見ることが出来る。その後、江戸元禄期には自由な発想と新しいデザインの、町彫りが現れ、明治以降には生活様式の変化に伴い、花瓶や置物などの器機からブローチやペンダントなどの装身具へと主流が移り変わったという。



「物づくりは苦しみづくり」。しかし「できたときの喜びがある」

「軍事的な仕事はこりこりでし、そういう意味では平和的な仕事でしたね(笑)」  
 仕事は指輪や時計バンドをプレスして作るというものだった。ところが、運命とは不思議なものだ。清水さんは、その仕事を通し、後に師と仰ぐ彫金師・柿島義香さん(荒川区の無形文化財保持者)と知り合うことになるのだ。  
 「柿島先生は私たちが工場で作った貴金属に彫金を施す仕事をさられていて、職人というよりどちらかという作家に近い方だった

たんです。で、私も絵が好きだったので、社長が、どうだ、お前も習ってみないか」と……  
 さっそく週末の工房通いが始まった。だが、清水さんは当時、亡くなった父親に代わり一家を支える大黒柱。  
 「だから、昼は製作所で働いて、夜は部屋にこもってひたすら練習です。早く一人前になって、家族を支えなくてはいけない――そんな気持ちしかありませんでしたね」  
 時代は、和彫りから洋彫りへの転換期。柿島さんはアクセサリを中心とした洋彫りを得意としていたが、和彫りにも卓越していたので、和洋二通りの彫り方を学んだ清水さんは、ペンダントやブローチのほか、指輪やネクタイピンなども手がけるように。その後、工房を立ち上げたのは25歳のときだ。  
 「といつても、最初は知人宅の一間を借りして、そこで家で寝泊りしながら、仕事をするような毎日でした」  
 30代になり、念願だったアパートに移ったものの、  
 「弟子を取るようになると、教